

論文内容要旨

Investigating of the usefulness of multidetector-row computed tomography for diagnosing abdominal visceral pseudoaneurysms
(腹部内臓仮性動脈瘤の診断における MDCT の有用性についての検討)

THE SHOWA UNIVERSITY JOURNAL OF MEDICAL SCIENCE

Vol. 27 No. 3 2015 年掲載予定

内科系放射線医学 保坂 憲史

【目的】腹部内臓仮性動脈瘤は動脈損傷の一形態であり、診断は通常、画像診断により行われる。致死率の高い非常に重篤な病態であり、迅速な診断及び治療が重要である。MDCT (Multidetector-row Computed Tomography) は登場以来、その時間分解能及び空間分解能の高さから様々な疾患の診断における検査法として適応が拡大しており、腹部救急疾患の診断にも不可欠な検査法となっている。腹部内臓仮性動脈瘤という致死的な病態であっても、経皮的血管塞栓術が速やかに成功した場合、良好な経過をたどるといふ報告もあり、早期の診断と治療の重要性を担う MDCT の診断的有用性を明らかにすることは重要であると考えた。血管造影上、仮性動脈瘤と診断された症例において、後方視点的に MDCT での仮性動脈瘤の存在診断および責任血管の同定について検討した。

【対象および方法】2008 年 1 月から 2014 年 10 月までの 7 年間に昭和大学病院で血管造影にて腹部内臓仮性動脈瘤を認めた症例のうち、術前に MDCT を撮影した 35 症例、年齢は 22～84 歳 (中央値: 67 歳)、男性 28 例、女性 7 例を対象とした。使用した装置は 64 列 MDCT (SOMATOM Sensation 64 SIEMENS Germany) 及び 128 列 MDCT (Definition AS+ SIEMENS Germany) の MDCT を用いた。血管撮影装置は、全例 AXION ARTIS SIEMENS Germany を用いた。血管造影所見を Gold standard とし、術前に撮影した MDCT 所見と比較、検討した。また、診断には、放射線科医 2 名以上の一致を用いた。

【結果】血管造影前に仮性動脈瘤の存在を MDCT で診断できた症例は、

88.6% (31/35 例) であり、更に責任血管まで同定出来た症例が 71% (25/35 例) であった。全例で血腫などの出血を示唆する所見が確認され、出血源の位置を推測できた。原因疾患は、悪性腫瘍関連病変が最多で全 18 例であった。内訳は食道癌術後 1 例、胃癌 4 例 (内 1 例術後)、胆管癌 9 例 (内 6 例術後)、十二指腸癌術後 3 例、肝細胞癌 1 例であった。その他の原因疾患は急性膵炎後 1 例、慢性膵炎後 5 例 (内 3 例は術後、1 例は急性増悪後)、外傷 3 例、十二指腸潰瘍 3 例、胆嚢摘出後感染合併症例 1 例、胆管炎後 1 例、弛緩出血 3 例 (1 例は子宮全摘後)、急性胆嚢炎後 1 例、特発性 1 例であった。

【結論】腹部内臓仮性動脈瘤の存在診断および責任血管の同定について MDCT の有用性が示唆された。